

積極的摘出を施行した Glioblastoma に関する早期再発例の臨床病理学的検討

Clinico-pathological study about early recurrent cases of glioblastoma extensively resected. Investigation of immunostaining, genome and transcription factor of early recurrence glioblastoma.

TCGA を代表とした大規模 study をはじめとした網羅的遺伝子解析が行われて以降、GBM に対する長期生存例のゲノムや転写因子の検討が多数行われている。しかし、結果として目立った因子が発見されておらず、従来注目されていた IDH1/2 mutation の有無についても長期生存の因子としては不確定的なものとする報告が多い。一方で予後不良群についての同様の検討はまだ少なく、その因子についてもまだ不明な所が多い。初回手術の摘出率や年齢、eloquent area 等による因子は従来から報告されているが、全摘出された群の中にも早期に脱落する症例を認めているのが事実である。この早期再発の要因となる免疫染色、ゲノムもしくは転写因子等の指標を解明することで、再発時に外科的切除や Bevacizumab による治療を早期に選択できる可能性がある。そこで我々は当科で手術を行った GBM の早期再発例についてその要因を検討した。

TMZ による治療が導入されて以降の 2006 年 9 月～2012 年 8 月に手術を行った 18 歳以上の初発 GradeIV 症例は 143 例であった。術中 MRI 施行し Volumetry による摘出率を評価できた症例は 106 例であった。摘出率は 95%未満が 19 例、95-98%が 14 例、98-100%摘出が 73 例であり、95%以上の摘出を行えた 87 例を対象とした。内 120 日以内に画像上再発を認められた症例は 11 例であった。年齢は平均 62 歳、男女比 8 対 3、病理学的には GBM 9 例、GBM with Oligo 2 例であり、IDH1/2 mutation は全例に認められなかった。また Mib-1 陽性率は平均 17.95%で他群と比較して有意に低値であった。さらにこれらの症例について SNP array を用いた遺伝子解析を行い、早期再発の因子を検討する。